

要旨

本論文では、女性の職業的成功がいまだ困難であった 18 世紀の旧体制下のヴェネツィアにおいて、職業画家ロザルバ・カッリエーラ (Rosalba Carriera, 1673-1757) がどのようにして成功を収めることができたかを明らかにするために、カッリエーラの作風、人間関係、作品販売戦略や価格設定、また彼女の生活ぶりや経済的活動について論じた。

カッリエーラに関する研究は美術史や文化史、ジェンダー史を中心になされてきた。とりわけ美術史においては彼女の画家としての才能や技巧が注目されてきた。カッリエーラの制作するミニアチュール画やパステル画はその時代の流行となるほど人気を博し、同時代の画家や諸外国のアカデミーからも評価された。男性支配が確立していた美術界で女性として画家の地位を築いたカッリエーラは、ジェンダー史の研究者たちにも注目されてきた。しかし、彼女自身の生活環境に関する社会史的な考察は少なく、彼女の具体的な経済的活動についても等閑視されてきたに等しい。カッリエーラが社会的・経済的に支えとなるだろう男性に頼らず自ら生計をたてることができた理由を彼女の美術的才能や自立心だけに求めるのは不十分である。

本論文では、カッリエーラをとりまいていた環境、人間関係、作品の特徴、作品販売の実態、日常生活に焦点を当て、彼女が近世ヴェネツィア社会においていかにして自立的な画家としての地位を築くことができたのか考察した。

第 1 章では、まず 18 世紀にいたるまでのヴェネツィア共和国の歴史を概観し、次いでカッリエーラの生きた社会のあり方を概観した。ヴェネツィア共和国は、地中海世界とヨーロッパを結ぶ中継地として商業的に発展し、15 世紀には栄華を極めたが、その勢いは時代を経るごとに度重なる戦争や疫病の流行などによって次第に衰え、18 世紀を迎える頃には国家財政は赤字の状態であった。一方、ヴェネツィアでは美術や音楽、祝祭や演劇などの文化が花開き、ヨーロッパの人々の注目を集めた。ヴェネツィアの都市住民は身分上、貴族、市民、庶民、聖職者、外国人に区分されていたが、女性は男性と同権ではなく、とくに貴族や市民の女性は家督を継ぐことはできなかった。女性には慎みが求められ、貴族や市民の女性はとくに行動が制限されており、近世においては服装に関する厳しい布告がたびたび出ていた。庶民の女性は、男性よりも職業が限られており、親方になれず賃金も低かった。ただし、女性には財産を所有する権利、また商取引や賃貸などの契約を行う権利があった。こうした状況はカッリエーラの画家としての自立を助ける要因のひとつであった。絵画や文芸の世界には、カッリエーラのほかにも著名人となった女性たちが存在していた。

第 2 章では、カッリエーラと同時代人の書簡や日記、刊行物などから、彼女の生い立ちを振り返り、彼女の家庭環境や人間関係を明らかにした。ほかの女性画家たちのように画家の親兄弟をもたなかったカッリエーラは、ヴェネツィア在住の複数の画家たちから絵の基礎を教わった。嗅ぎたばこ入れの装飾をはじめとし、ミニアチュール画やパス

テル画を制作することで若いうちから画家としてある程度の収入を得ていた。カッリエーラの作品は、外国からヴェネツィアを訪れる人々や同時代の画家たち、パリやロンドンなどから来た美術品収集家に注目された。カッリエーラは彼らの支援によってローマやボローニャ、パリのアカデミーから高い評価を受けることができ、ヨーロッパ諸国において画家としての名声を得た。このことはさらなる顧客の増加に繋がった。本章ではカッリエーラの人格や思想が彼女の周辺にいた弟子たちにどのような影響を与えていたかについても考察した。カッリエーラは男性が支配している絵画の世界において活動し続け、生涯独身であった。カッリエーラは性別を強く意識し、男性中心の世界に批判的な眼差しを向け、書簡や日記に独自の見解を記していた。

第3章ではカッリエーラの制作したミニアチュール画とパステル画について分析した。カッリエーラは嗅ぎたばこ入れの装飾として蓋の内側の象牙でできた部分に絵を描いていたが、やがてそれらの絵の部分だけが独立し、ミニアチュール画という美術作品として取引されるようになった。パステル画に関しては、カッリエーラはその画材の質にこだわってあちこちからパステルを取り寄せており、パステルの特質である粒子的な質感を生かして描いていた。またカッリエーラは、宗教画に関してルネサンス期の画家たち、とりわけコッレージョの作品の模写をすることで描き方を学んだ。肖像画や寓意画においても従来の規範や規則を理解していたが、カッリエーラは自分のオリジナリティーを加えた作品を制作していた。注文者たちがとくに好んだカッリエーラ作品の特徴は、繊細な柔らかな色合いや生かして「優美さ」を表現している点、君主たちの肖像画や宗教画において身分・地位・格式ではなくそれぞれの人柄や個性を際立たせている点、寓意画や神話画において実在する人物を描いた肖像画との区別をあえて曖昧にしている点である。とりわけ客に人気が高く、複製を依頼された作品として、本論ではヴェネツィア女性をモデルにした「美人画」を例にあげた。

第4章では、書簡や日記、遺言書、財産目録、備忘録からカッリエーラの作品の取引の仕方を詳述した。カッリエーラは観光地ヴェネツィアを訪問する人々との人脈によって新たな客や収集家たちとのネットワークを広げた。そのために遠方からも書簡で注文を受けていた。たいていの場合は彼女は、客との間に仲介者をおき、郵便制度や個人による配送を使って作品を販売した。その過程で作品の紛失や破損、汚損などの危険もあったが、カッリエーラはそれらを防ぐ配慮を行いながら作品を郵送していた。本章では作品の価格についても分析を行った。作品のテーマや寸法、注文者とカッリエーラとの心理的な距離によって左右されることもあったが、基本的にミニアチュール画が10～15 ツェッキノー、パステル画が20～30 ツェッキノーまたはそれ以上の価格で購入されていた。注文が殺到していた時期の日記をもとに彼女の年間収入を割りだすと、その最大値は535 ツェッキノーであった。これは手工業者や書記官、公証人などの一般的な収入よりも高額であった。カッリエーラは独立した生計をたてることのできる収入を画業で得ていたのである。貴族や市民の女性だけに着用が許されていたドレスやダイヤモンド

ドの耳飾り、72 ツェッキエーノのフォークセットなど、日記や財産目録に記された持ち物は、彼女がかなりの財産を有していたことの裏付けとなる。カッリエーラは公証人の友人の助言をもとに複数の組合や慈善院への投資も行っており、将来のために貯蓄を残していた。それらはカッリエーラの生前の遺言に従って彼女の身内や弟子たち、そして教会や修道院、慈善院などへの寄付として分配されたのであった。

上述の分析や考察から、結論において解明できたことは次の通りである。ロザルバ・カッリエーラは、若いころから築いてきた人間関係を維持・拡大し、作品販売において工夫を凝らし、将来を見据えて投資や貯蓄を行うことで経済的に自立し、自分自身の工房をもち、豊かな生活を保つことができた。ヴェネツィアを訪れる人々を相手にみやげとして作品を販売し、遠方の客とは書簡を利用して繋がりを保って広範囲に注文を受け、郵便制度や個人の配達によって客のもとに作品を届けた。カッリエーラの販売するミニチュール画とパステル画には基本的に一定の価格が設定されており、作品販売で得た最大の年間の収入額は共和国の官吏の一般的な収入よりも高額であった。カッリエーラはかなりの財産をもっており、それらをもとに投資と貯蓄を行っていた。カッリエーラが画家として活動していたときも失明していた晩年でさえも、経済的に誰かに頼る必要がなかったのは、その結果である。たしかにミニチュール画やパステル画におけるカッリエーラの才能と技巧は高く評価されていた。しかし、カッリエーラが社会的・経済的に自立した状態を生涯を終えるまで保つことができたのは、18世紀前半におけるヴェネツィア社会という舞台を利用した絵画の制作・販売戦略および徹底した財産管理があったからこそである。ロザルバ・カッリエーラは、絵の才能だけでなく自立的精神とビジネスセンスを合わせもった職業画家として活躍した女性なのである。以上が先行研究ではほとんど追究されていない新しい知見である。なお本論文の成果は、他のケースとの比較や新しい事例の掘り起こしにも役立つはずである。